

<論文>

中国人日本語学習者による日中同形語の誤用について

—共有する意味を持つ「参考」「緊張」「注意」「一時」の場合—

張金艶, 谷守正寛

On Chinese learners' improper use of Japanese-Chinese isomorphous words

- In case of “*Sankō*” “*Kinchō*” “*Chūi*” “*Ichiji*” bearing common meanings -

ZHANG Jinyan, TANIMORI Masahiro

キーワード：日中同形語，誤用，参考，緊張，注意

Key Words: Japanese-Chinese isomorphous words, improper use, *sankō*, *kinchō*, *chūi*

1. はじめに

日本語と中国語（以下、日本と中国を指す時は、ここでは便宜上「日中」と呼ぶことにする。また、日本語と中国語の両方を指す時は「日中語」などと簡略する。）に同形語が数多く存在することは周知の事実である。そうした同形語は、特に日本語を学ぶ中国人日本語学習者に誤用を招くことがある。日本語教育の視点に立って述べれば、中国人日本語学習者にとって、そうした語は同じ漢字（簡体字の場合は形状が異なるが、元々同じものであれば概ね同形とみなす。）で表記されるために、意味が容易に分かり正しく使えるだろうと推測してしまい、指導上特に注意を払わない可能性がある。初級レベルのコミュニケーションにおいては、さほど深刻な問題を発生させるわけではないかもしれないが、ビジネス文書並の上級レベルの学習者の作文においては、同形語の誤用は決して小さな問題ではない。また、語の使い方を誤解したままで誤用し続けるということは教育上望ましくはない。そこで、本稿では日中同形語の誤用について分析することにした。特に、そのうち意味を共有する同形語の誤用について、これまでとは違った新しい視点から考察を進めたい。

同形語とは、大河内(1997)では「いずれがいずれを借用したかを問わず、双方同じ漢字で表記されるものを同形語とよぶ」(p. 412)と定義されるものである。本稿でも基本的にこの定義に従う。さて、しかしながら、このような同形語の数がどれくらいあるのかについては、実は明確には言えない。なぜなら、統計の対象や方法が異なるために、得られる結果が異なってくるからである。1つの信頼できる統計としては沈(2010)がある。それによると、HSK（中国語能力認定試験）4つのレベルに出てくる合計8,822語の語彙、及び『現代漢語頻率詞典』にある「报刊政论」（新聞・雑誌の政治評論）と「科普报刊」（一般向けの科学読み物）と「生活口语」（日常生活の話し言葉）の中から使用頻度が高い各4,000語（4,000×3＝合計12,000語）から重複する語を除外した残り10,317語について調べたところ、日中同形語は3,882語に上るといった結果が得られている(p. 22)。

同形語は書体（簡体字と繁体字の違いを指すが、上述したように、オリジナルが同一の漢字であれば若干の字形上の違いは同じものとみなす。）と意味がともに同じものもあるが、意味

の違いが生じたのも少なくない。また、漢字使用の長い歴史の変遷を経る中で生じた意味の違いは、日中言語のいずれにもみられる。こうした日中同形語について研究する場合、語源に基づく分類が行われることもあるが、意味論的にみれば、同形同義語、同形類義語、同形異義語に分類するのが一般的である。例えば「大学」や「生活」といった漢字語をいずれも同形同義語とみなすことについては一般に認められているとみてよいだろうが、同形類義語と同形異義語については見解の相違がみられ、必ずしも基準が統一されているわけではない。しかし、例えば日中語の「医院」の違いについて言えば、それは日中語が表すそれぞれの医院の規模に違いがあるだけなので、本稿ではこのような語も同形類義語とみなすことにする。いずれにしても、同形類義語については本稿の直接の研究対象とはせず、これ以上は扱わないこととする。

2. 同形異義語の分類

本稿は、日中語で意味が異なることによって誤用を生むような「差別」といった語のような同形異義語を考察するものではない。注目したいのは、同じ意味を共有するにもかかわらず、依然として学習者に誤用されるような一部の同形語であり、従って、同形同義語と同形異義語の共有する意味に絞って考察を進めることになる。

同形同義語については、その分類について特に大きな問題はないと思われるので、同形異義語について、その分類を次に確認する。その上で考察を展開することにする。()内では例を挙げ、意味の違いを説明する。

A類：まったく意味の違うもの

(「手紙」…日本語では「文書」、中国語では「トイレットペーパー」の意味になる。)

B類：同じ意味を持つが、中国語では他の意味もあるもの

(「緊張」…中国語では「忙しい」「不足する」という意味もある。)

C類：同じ意味を持つが、B類とは反対に、日本語では他の意味もあるもの

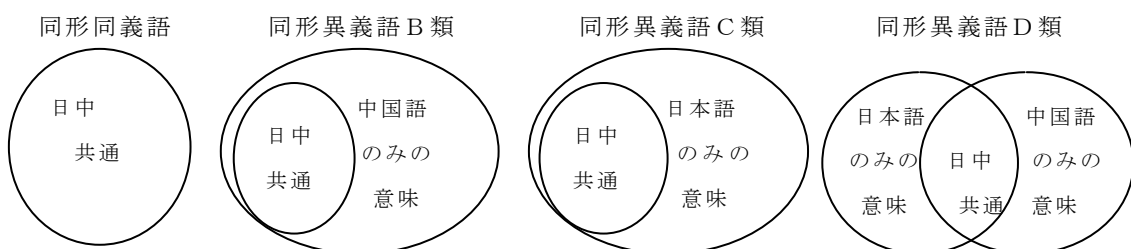
(「勝負」…日本語では「試合」の意味もある。)

D類：同じ意味を持つが、それぞれに他の意味があるもの

(「翻訳」…日本語では「訳本」、中国語では「通訳」という意味もある。)

同形異義語には一般的に上のような4種類の分類がなされており、本稿でもこれを援用したい。

考察対象の同形同義語と同形異義語B・C・D類の意味の分布を、それぞれ分かりやすく図示すると、下図のようになる(図1)。



<図1>

本稿では、従って、同形同義語及び同形異義語B・C・D類が日中語の間で共有する意味を含む部分に注目し、考察の対象として取り上げることになる。図1の意味の分布において、意

味が異なる部分についてはその語の用法も当然異なるとみてよいが、問題は、学習者が、意味を共有する日中語についてもその用法が同じだろうと推測してしまいがちなことなのである。つまり、本稿で問題とするのは、日中語の意味の共通部分が果たして、その用法などにおいても同じと言えるのかどうかという点なのである。

3. 同形語の用法について

3.1. 「参考」の場合

「参考」は日中同形語である。日本語の「参考」の意味は、『広辞苑』によると、「てらしあわせて考えること。自分の考えややり方を決める手がかりとすること。また、その材料」(p. 1107)とある。一方、『学漢語用例辞典』によれば、中国語の「参考」とは、「为了学习、研究或了解情况而查阅、利用有关资料。可以利用的有关材料（学习，研究，状况を理解するために資料を調べ、利用する。または、利用できる資料）」(P. 94-95)とある。管見の及ぶ限り、日中同形語「参考」が同形異義語または同形類義語としては同形語辞書に収録されていないようである。言い換えれば、「参考」は一般に同形同義語とみなされていることになろう。確かに「参考資料(参考资料)」や「参考文献(参考文献)」といった表現では、用法がほぼ一致していると言える。

ところが、以下の例を見られたい。ただし、下線部以外の箇所での誤用表現は一部著者が修正を施した。

(1)日本の「国字」はいつから現れるのか、「日本書紀」に天武天皇の昔話を参考する可能性
がある。

(2)「友情についての話題」を参考してください。

上の2つの誤用例は、著者が所属する日本語学科で研究指導を行った学生の書いた卒業論文からのものである。この誤用の原因を推測すると、いずれも中国語の「参考」の用法の影響によるものだと考えられる。「参考」は同形同義語なので、意味による誤用ではないと推定できる。

そこで、意味ではなく品詞について考えることにしてみよう。すると、中国語では名詞でもあると同時に動詞にもなるのに対し、日本語では名詞としてしか使われないことに気づく。例えば、「写这方面的论文,应该参考一下这几本书。」といった文を日本語に訳す場合には、中国語では「参考」が動詞であるにもかかわらず、「この分野の論文を書くには、これらの本を参考にしたほうがいい。」というように、名詞として扱って訳さなければならないことになる。このように、たとえ意味が同じ同形同義語であっても誤用が生じることについては、改めて考え直す必要があるということになる。

3.2. 「緊張」の場合

まず、王(2009)にある日本語の「緊張」と中国語の「紧张」の記述(p. 78)を引用し、見ておく。

日①[同]心が張り詰めてゆるみのないこと：紧张

緊張した顔つき/紧张的表情

②[同]両者間・両国間の関係が極度に悪くなった様子：紧张

あの二人の仲はとても緊張していて、離婚は時間の問題だ。/那两口子关系很紧张,

离婚只是时间的问题了。

中①[同]日本語の①②と同じ。

②[異]激しさや緊迫感で、気が休まらない様子。

局势紧张。/情勢が緊迫している。

③[異]供給が不足している。

电力紧张。/電力が供給不足である。

④[異]物事の進み具合が速い様子。

紧张而有序地工作。/てきぱき順序よく仕事をする。

以上の王(2009)の記述からみると、日本語の「緊張」と中国語の「紧张」は、本稿で言う同形異義語B類に属することが分かる。つまり、中国語の「紧张」には、①に記述されたように、日本語の「緊張」の①と②の意味を共有する部分があると同時に、日本語の「緊張」にはない②③④のような意味も持っているのである。なお、前述したが、本稿では、「緊張」と「紧张」の共通する意味に注目するので、中国語にあって日本語にはない別の意味がどのような日本語に対応するのかといった問題については考察しない。

さて、意味の上では、日中語ともに「心が張り詰めてゆるみのないこと」、「両者間・両国間の関係が極度に悪くなった様子」という意味を持っており、それが日中共通の部分としてみて差し支えない。しかしながら、中国人の日本語学習者は、「紧张的表情」を「緊張な表情」や「緊張的な表情」と訳すような誤用文を作ることが多いのも事実である。この場合の「緊張」と「紧张」は日中語ともに意味においては対応している。にもかかわらず、誤用が生じるのはなぜだろうか。

意味が同じ同形語を使った場合の誤用作文例を見ると、実は、品詞が異なっているのである。つまり、上の例では日本語「緊張」がサ変動詞であるのに対し、中国語「紧张」は形容詞なのである。こうした品詞の違いによる誤用はこれまであまり指摘されてきておらず、本稿においてはじめて明確に指摘される重要な点であると言えよう。

ただし、王(2006)においても「緊張」に関する誤用例が、次のように挙げられてはいる(p. 97; p. 333)。下線部の後の()内はそれを正しく言い換えた表現である。

(3) 母は貿易会社で働いています。仕事は非常に忙しくて紧张です(緊張しています)。

(4) 東京の生活は紧张だ(緊張する)し、ストレスも重い(多い)し、大変だった。

(5) 「こんな(こんなに)長い時間が経った(時間が経っている)のに、どうして私(自分)の成績が今まで(まだ)しりません(わからないんだ)。 」と思った。ぱっと紧张になった(緊張した)。

(4)(5)は付録の誤用例集にある例であって、特に説明はされていない。ただ(3)については、王(2006)の分析があり、「動詞と名詞の混同」からきたものとみなされている。すなわち、日本語の「緊張」は動詞であるが、中国人の日本語学習者には名詞として使われているということである。上述したように、中国語の「紧张」は形容詞であり名詞ではない。特に(3)の「忙しく」を修飾する「非常に」は、学習者が「緊張」を中国語と同じく形容詞として作文した証左であろう。つまり、「緊張」を名詞ととらえていれば、程度副詞「非常に」とは共起させないはずだからである。

以上の3例について、「緊張」の誤用の原因をまとめると、学習者は「動詞と名詞の混同」によってではなく、日本語としては正しい品詞である(サ変)動詞としての認識がなく、形容

詞（形容動詞）として使っていることになる。こうした原因から推測できることは、この誤用はほとんどの中国人学習者に共通する現象であろうということであり、その点では、日中同形語の品詞が異なることによる誤用を、本稿ではじめて明確に指摘できたと言える。

ここで視点を変えて、この問題を再度考えてみる。『広辞苑』には次の例がある(p. 734)。

(6) 緊張を和らげる。

(7) 国際緊張

(8) 緊張緩和

これらは日中語で共有する意味を表す例であるが、この場合の「緊張」はたしかに「名詞」としての用例である。しかし、「緊張」を形容詞だと捉えがちな中国人が、日本語の「緊張」を名詞であると学習し、正しく認識したとしても、(4)の「東京の生活は緊張だし…」が非文になる理由は依然として理解しがたいだろう。それは、日本語の「緊張」は名詞であるにもかかわらず、「…は緊張だ」といった名詞文の述語の補語にはなりにくいからである。

以下の例を見られたい。*はその文が非文であることを示す。

(9) 1 + 1 は 2 だ。

(10) 服は派手だ。

(11) *私が嫌うのは彼女の派手だ。

(12) 大事な場面で足を引っ張るものは余計な緊張だ。

(13) 生唾を飲むのも緊張だ。

(14) *生活は緊張だ。

(9)～(14)はいずれも「～は～だ」文であるにもかかわらず、(11)と(14)は言えない。同じ「派手」「緊張」を使った文であっても(10)(12)(13)は言える。「緊張」は「…は緊張だ」といった名詞文の述語の補語にはなりにくいと述べたが、(12)(13)のように言うことは可能である。こうした現象について十分に理解できない学習者がいることは容易に想像できよう。その文が文法的であるか否かという文法性についてこのような違いが出るのはなぜだろうか。

まず、三上(1953)のいう3つのタイプの名詞文を、例とともに簡略化して挙げる。

I. 措定(第一準詞文)…犬ハ動物ダ

II. 指定(第二準詞文)…幹事ハ私デス

III. 端折り(第三準詞文)…明日カラ学校ダ

三上(1953)の分類に従って分析すると、(9)は「 N_1 は N_2 だ」という指定文であるが、成立する条件「 $N_1 = N_2$ 」からみると、(9)の「 $1 + 1 = 2$ 」という関係はこの条件を満たしている。こうした指定文の作文であれば誤用は起こりにくい。これに対して(14)では「生活 = 緊張」とならず、指定文としては言えない。一方(12)では「足を引っ張るもの = 緊張」という関係にあり、指定文として言える。(13)では「生唾を飲むこと = 緊張」ではないが、生唾を飲むことが緊張の一部だという意味で、措定文として言える。ところが、(10)では「服 = 派手」とはならず、措定文にもならないものの文として成り立つ。これは、「派手」は「派手を好む」と言えるように名詞としての性格を持つが、形容動詞としても使えるために、実は、服の性質・状態を表す形容詞文となっており、問題はないのである。こうした様々な現象が中国人学習者に誤用を引き起こさせていると考える。

学習者は類推によって、「派手」と同じように「緊張」を使っても(14)のような作文ができると考えるのであろう。むしろ(12)や(13)のような文は難解で、そもそも「緊張」を名詞とし

て認識していないので、このような作文は発生しにくいだろう。(11)も「派手」を名詞として認識した指定文であるため、誤用であるものの発生はしにくいと予想できる。(11)が言えないのはさらに複雑な原因による。なぜなら「派手を好む」が言えるなら、「嫌うのは派手だ」が言えそうだからである。しかし実際は不自然である。これは慣用的に言えるかどうかによると思われるが、ここでは日本語の名詞を中国人が形容詞として扱って誤用する場合を考察しているので、これについては本論からは逸れるのでこれ以上はふれないことにする。

むしろ誤用として発生しやすいのが、(10)からの類推による誤用例(14)のタイプであることを示せたと思う。(14)のタイプが成立するとみなす中国人学習者は、中国語の「紧张」の母語干渉を受け、類推によって、「緊張」を「名詞」としてではなく、形容詞としてとらえているのである。従って、王(2006)の言うような「動詞と名詞の混同」ではないことが分かった。

3.3 「注意」の場合

王(2009)の「注意」についての記述(p. 219)を見られたい。

日①[同]ある事に特に気をつけること。：注意。小心。

注意を喚起する/喚起注意。

スリに注意!/小心扒手!

②[異]気をつけるように相手に言うこと。：警告。提醒。告诫。

注意を与える。/提醒。

中[同]日本語の①と同じ。

注意安全/安全に気をつける。

夏天要特别注意饮食卫生/夏は特に飲食物に用心する必要がある。

过马路时你要注意往来的车辆/道を渡るときは車に注意しなさい。

上の記述から、「注意」は同形異義語C類に属し、「ある事に特に気をつけること」という同じ意味を共有するが、日本語にはさらに「気をつけるように相手に言うこと」という中国語にはない意味もあることが分かる。

日本語「注意」は名詞またはサ変動詞であり、中国語では動詞であることが用例からも確認できる。しかし、さらに注目すべき点としては、中国語では他動詞である一方、日本語では自動詞にもなるということが挙げられる。例えば、「注意车辆」という中国語の表現を分析すると、「车辆」は「注意」の目的語なので、「車に注意する」ではなく「車を注意する」と訳す学習者が予想される。このことは、「だから、そのようなストレスを解消させるために次のものをを注意しなければなりませんでした。」といった中国人の上級日本語学習者の作文でも確認できる。これは母語干渉による誤用である。

日中同形語での品詞のずれによる誤用のほかにも、共有すると思われる意味を表す場合に、日中両言語がはたして形式的に対応しているのかどうかという点に注目しよう。

次に、日本語の「注意」がどのような中国語に訳されているかを見られたい。

(15) 奇抜な服装で人の注意を引く。/穿离奇古怪的衣服惹人注意。

(16) 足元に注意する。/留神脚下(当心脚底下)。

(17) 車に注意していきなさい。/路上要小心汽车。

(18) 注意してみる。/仔细看。

(19) 注意して聞く/留心听。

(20) あの男には注意したほうがいい/对那个男人要提防着点儿。

上の6文の「注意」の中国語訳としては、「注意」の他に、「留神」、「当心」、「小心」、「仔细」、「留心」といった様々に異なる形式の言葉が表れている。

また次のように、商品の包装箱などに印刷されている表示の実例を見ると、いずれも日本語の「注意」に対応する中国語では、表現の内容によってすべて異なっている。

(21) 発火注意/容易起火

(22) 日光注意/不得日晒

(23) 湿気注意/勿使受潮

(24) 熱気注意/离开热气

反対に、中国語の「注意」に対応する日本語にはどのような言葉があるのかを確認すると、『中日辞典』(p. 2024)によれば、「注意する」、「注意を払う」の他、「気を配る」、「気をつける」、「心がける」といった表現が見られる。これは、日中の漢字語を訳す時には、たとえ日中同形語の意味が同じだとしても、文の内容によっては、必ずしもその同形語がそのまま使われるとは限らないことを意味する。

3.4. 「一時」の場合

この同形漢字語は同形語辞書に取り上げられていないため、張・他(2007)に従って意味の分類を整理すると、以下の通りになる。

[共通]①(かつて)ある時

彼は一時えらい人気だった/他红极一时。

②しばらく、少しの時間

この流行は一時の現象にすぎない/这种流行只不过是一时现象而已。

③その時かぎり、当座

一時の出来心からした事だ。/因一时的邪念干的事情。

日[異]①時刻

午後一時に来なさい。/请下午一点来。

②同時、一度

一時に乗客が殺到した。/乗客一下子纷涌而至。

中[異]①時には(一时…一时…の形で)

心情一时好，一时坏。/時によって機嫌がよかったり悪かったりする。

こうしてみると、「一時」と「一时」は同じ意味を持つだけでなく、日中両言語がそれぞれ別の意味も持つことが分かる。従って、このタイプはD類と見てもよからう。

「一時」は、「注意」と同じく、日中語で共通する意味を表す場合でも、その表現は必ずしも一致しない。例えば、

(25) 一时难以解决。/しばらく解決するのが難しい。

においては、「一时」は「少しの間」「しばらく」の意味であり、日本語に訳す時に同じ意味の「一時」でよいと思われるだろうが、実際、上のように表現を変えなければ自然な表現にならないのである。これは、品詞の誤用ではない別の問題を含んでいる。こうした指摘も、今後、日中語の比較においては十分になされていかねばならないと思われる。

またさらに、中国語の「一时」が「ある時」という意味を表す場合、日本語と共有する意味

として使ってよいが、一般にはむしろ書き言葉で使うのが自然であるといった制約がある。このようにほかにも様々な問題が残ることが窺える。

4. まとめ

本稿は、同形同義語と同形異義語B・C・D類の共有する意味を使って表現する場合の語の使い分けに注目し、そこで起こる誤用の原因について、新しい視点から考察を行った。日中同形語を見た時に、意味が異なるなら用法も異なるだろうと学習者が考えるのは十分あり得ることであり、言い換えれば、意味を共有するなら用法も同じであろうと類推するのであろう。学習者の内観について調査するには及ばなかったが、参考資料、作例、実例などに表れる現象を分析することによって、日中同形語が意味を共有しながら誤用を招く原因を探ることができた。

本稿の考察を通じて、たとえ意味を共有する同形語であっても、品詞や使われる文体が異なるものもあれば、日本語に訳す場合にそのままでは使えない場合もあることが分かった。

さらには、「空想」のように、同形同義語でありながら、中国語ではマイナスのイメージを伴うが、日本語ではそうしたイメージがないものもある。つまり、意味・用法ではなく、同義語が持つイメージが異なるケースもあるという話者の抱くモダルな問題である。中国人日本語学習者は、母語の「空想」の持つイメージに影響されて、日本語の「空想」の使用を回避することになる。このような意味分析だけでは解決できない側面も残されていることを指摘しておく。

著者は、従来の方法による意味分類を否定するつもりはない。これまでの研究に加えて、本稿の考察も効果的に取り込んでいけば、日中同形語の誤用回避に効果があるものと信ずる。つまり、今後、日本語教育の現場において日中同形語が教育材料として取り扱われる時には、学習者の誤用を防ぐために、単に意味的な共通点と相違点を示すだけでなく、品詞や文体上の使用の違い、語の持つイメージなども教えることが効果的であり、さらには、意味が同じであっても訳す時に必ずしもそのまま使えない場合もあることなどを、学習者に例示し説明することが必要であるということである。とりわけ、中国人日本語学習者の母語干渉による誤用は、閲読したり日本語を中国語に訳したりする場合よりも、日本語の作文や中国語を日本語に訳す場合により頻繁に見られ、日本語教育の問題として提案できよう。

こうした問題は日本語教育の現場に限ったものではない。日中同形語に関する研究は、科学史といった他分野でも行われていながら、その研究成果が言語研究や言語教育には反映されてこなかったと言える。一方、言語研究の分野では、同形語の研究がありつつも、同形語の分類や意味の違いの整理などにとどまっているのがほとんどであった。また、1つ1つの同形語についての包括的な調査研究はまだ数少ない。しかも、これらの研究成果が教育現場にはまだほとんど活かされていないのが現状である。

本稿では、同形同義語と同形異義語B・C・D類から、それぞれ典型的な語として1語ずつ取り上げるとどめたが、橘(1994)には、『漢語水平詞匯大綱』の8,822語(連語・成語など含む)のうち、一般の国語辞典と照らし合わせながら、日中同形語4,683語を抜き出して調べたデータがある。それによると、同形同義語が72%、同形異義語B・C・D類が22%、同形異義語A類が6%である。すでに述べたように、調査対象によって得られるデータが様々であるものの、例えば上の日中同形語の94%(72%+22%)を占める同形同義語・同形異義語B・C・D類の中に、本稿で問題とするような同形語が実際にどれぐらいあるのか、その実態を把握す

る必要がある。本稿で例示した日中同形語の違い以外にも漢語に関して問題とすべき点が、ほかにもまだありうる。今後の課題としたい。

張金艷（内蒙古師範大学外国語学院日本語学科）

谷守正寛（鳥取大学国際交流センター）

SUMMARY

When a student sees a Japanese-Chinese isomorphous (*or* equiform) word, if meanings differ, he/she may think that usages probably also differ. This paper took notice of proper use of the word in the case of expressing the meaning which isomorphous synonymous words and homonyms B-C-D types share, and gave consideration to the causes of improper use caused by Chinese learners of Japanese, from a new viewpoint.

AUTHOR AFFILIATIONS

ZHANG Jinyan (Inner Mongolia Normal University; Japanese Department, School of Foreign Languages)

TANIMORI Masahiro (Tottori University; Center for International Affairs)

参考文献

- (1) 沈国威(2010)『近代中日词汇交流研究』中华书局. p. 22.
- (2) 刘川平・他(2009)『学汉语用例词典』北京语言大学出版社. pp. 94-95.
- (3) 王永全・他(2009)『日汉同形异义语词典』商務印書館. p. 78/p. 219.
- (4) 張金艷・他(2007)『ここが違う日中漢字語』鳥取大学国際交流センター.
- (5) 王忻(2006)『中国日语学习者偏误分析』外语教学与研究出版社. p. 97/p. 333.
- (6) 相原茂(2002)『中日辞典』(第二版)講談社. p. 2024.
- (7) 大河内康憲(1997)「日本語と中国語の同形語」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版社(東京). p. 419
- (8) 新村出編(1998)『広辞苑』(第五版)岩波書店. p. 734/p. 1107
- (9) 橘純信(1994)「現代中国語における中日同形語の占める割合」『国際関係学部研究年報(日本文学)』15. 日本大学国際関係学部.
- (10) 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院.